

もっと知りたい

武者小路実篤

かんとうだいしんさい

関東大震災から100年

実篤、 被災地・東京へ

*緑色は実篤の引用。全て「一人の男」43・44章 昭和46(1971)年より

……9月1日 11時58分

関東地方で大地震が発生！実篤が生まれ育った家（実家）がある東京は大きな揺れと火災に見舞われる。しかし、宮崎に暮らす実篤は、まだ何も知らない…。

……9月3日 朝

実篤のもとに宮崎の新聞が届き、震災のを知る。実家に暮らす母や甥の実光（兄の子どもで13歳）は無事なのか…。心配した実篤は、慌てて東京へむかう！

ぼくは大震災のことを聞いて、なんとと言っても、母の身を一番心配した。



移動 宮崎→山口

この頃はまだ、新幹線や飛行機は通っていませんでしたので車で移動。途中、出産をひかえて山口で暮らしていた妻・安子の家による。

……移動 山口→京都

京都で暮らす親友・志賀直哉（文学者）のところによる。志賀は震災後すぐに東京へ行き、京都に帰ってきたばかりで、東京の様子を教えてくれた。

君の家族は無事だ！
親戚の甘露寺さんの家に避難しているよ。

地震の後の火災で、君の実家はすっかり焼けてなくなりました。

京都で足止め

戒厳令のため、東京には許可が必要。許可をもらいに京都市庁へ行くが、もらえない。志賀に相談すると大阪市のほうがいいかもしれないとアドバイスをもらう。

戒厳令…自然災害や戦争など緊急事態に政府がだす命令。関東大震災では被災地での混乱や犯罪などを防ぐため、その地域に入る人を制限しようと、許可を取ることを条件とするなどした。

……次の日

京都市庁へ行く。しかし、許可がもらえない。

僕は生れて初めて母に逢うために許可がもらえるような目にあつた…
母のことを思い、泣くまいと思えば思うほど涙が出てくる…
母に逢いたい、母を慰めたい一心だった。



……東京へ入る許可がもらえず悲しむ実篤の前に、学生の頃の友人・岡部長景がたまたま現れる。

ひさしぶりだなあ！
こんなところで会うとはおどろいた。

今、外務省で働いているから大阪市庁の人をよく知っているよ。君の事情を話してあげよう。

……岡部の手助けで、東京へ入る許可をもらえた！

僕はともかく許可を得られ、
大喜びで志賀のところに帰った。

……移動 京都→高崎(群馬)→板橋(東京)→千駄ヶ谷(今の渋谷区)

志賀のもとで勉強していた若者・瀧井孝作(のちに文学者となる)とともに京都を出発。いつもなら汽車は東海道線を進むが、地震や津波で線路が壊れて通れないため、遠回りしなければならない…。

汽車は勿論、真直ぐ東京駅には行かなかった…
米原か名古屋あたりで東海道線からはなれたか
と思う。僕はともかく京都から満員の汽車に
乗っていた。高崎(だと思う)に来て、瀧井君が
乗換えだと言うのであわてておりた。そしてそ
こにとまっていた汽車に乗った。と言ってもそ
の汽車は超満員で入口からは乗れなかった。瀧
井君が要領よく窓から乗って、僕を窓から引き
ずり上げてくれた。



この汽車も板橋が最終駅で、そこに降ろされ、瀧井君ともそこで別れたと思う。それから甘露寺家にいる母のところはどうやって行ったのか、僕は完全に忘れている…歩いたのだと思うが、その記憶は不思議に残っていない。そして番地も知らない甘露寺さんの家はどうしてたどりつけたのか、今考えると不思議である。

……到着

やっとの思いで千駄ヶ谷の甘露寺家に着いた実篤。
母と無事に再会でき、二人は泣いて喜んだ。

母の記憶

地震で麹町(今の千代田区)の家は傾いてしまいました。すぐに
実篤の知り合いの方が心配して来てくれて、高齢で歩くのが難し
い私を椅子にさせて、安全なところへ運んでくださいました。避
難した四谷見附(千代田区)で一晩すごしている間に、家は火災
に巻きこまれて焼けてしまいました。

*実篤が宮崎を出発してから母と再会するまで、1週間ほどかかったと考えられます。



実篤の思い

「焼けたものに未練を持つほど、馬鹿ではない。

母と実光と、その他 僕の家にはいた人が誰も無事だったことはありがたかった」